

新刊紹介

山本五月

『天神の物語・和歌・絵画』

―中世の道真像―

安原 眞琴

本書は、著者の七回忌に刊行された著書であり、提出直前だった幻の博士論文でもある。

山本五月氏は、立教大学博士課程在学中の二〇〇六年三月三日に、不慮の事故で亡くなられた。博論提出目前で、それに向けた本格的な準備に入ろうと、日用品や飼いの猫の食料などを普段より多めに買いだめした帰りに、帰らぬ人となった。

草稿も未完だったので既刊の論文を集めての刊行となった。出版が七回忌まで延びたのは、五月氏のご主人勉氏の心の整理がつかなかったためであり、それは今でも変わらないという。筆者もそうだが、著者を知る人は誰もが、同様の思いを抱いていると思う。

著者は、一九九八年の初の論文発表から、

十年弱という短期間に約二十編もの論文を発表した。このうち本書には、学会誌等に発表されたすべての学術論文が収録されている。目次を掲げれば以下の通りである。

刊行にあたって（小峯和明）

はじめに

序章 菅原道真の生涯とその神格化

第一部 天神縁起絵の生成

第一章 『日蔵夢記』の成立―『北野

文叢』所収永久寺本を中心に

第二章 道賢（日蔵）伝承の展開

第三章 日蔵説話の変容と『北野天

神縁起』―メトロポリタン美術館本を

中心に

第四章 『日蔵夢記』に見る道真像

―太政威徳天の姿

第五章 追憶する神―延慶本における

天神の託宣

第二部 室町絵巻の改変

第一章 『日蔵夢記』と天神信仰の

形成―太政威徳天の姿と言葉

第二章 『北野天神縁起』『日蔵冥

界巡歴』の段をめくって―室町絵

巻に描かれた帝釈天

第三章 道明寺天満宮蔵「北野天神

縁起絵扇面貼交屏風」の特質―モ

チーフ絵画化の観点から

第三部 『天神の本地』の物語・和歌・絵画

第一章 『天神の本地』の基礎的研

究―東洋文庫蔵慶安版本を中心に

第二章 思ひきる心の剣―天理二卷

本系統の呪歌

第三章 雪につつまる鶯の声―天神

和歌の寓意

第四章 天神異聞

第五章 天神と童子―中世天神信仰の

物語と図像

山本五月のこと（山本勉）

本論は三部から成る。これは著者の博論構想を思い出しつつ、遺志を付度してのことであるという。

序章も含めた各章は、原則的に論文初出時の体裁、内容、題目に依拠している。また「はじめに」は、後期課程四年時の二〇〇五年一月に提出された『二〇〇四年度博士論文中間報告書』冒頭の「概要」からの転載である。そして、これらを挟み込むかたちで、冒頭に小峯和明指導教授による

「刊行にあたって」と、末尾にご主人勉氏による「山本五月のこと」という二つの文章が掲載される。

筆者は本書を、研究者に限らず一般読者にも読んでもらいたいと思っている。それだけ価値のある著書だからである。しかしながら学術論文であり、かつ著者の意志を尊重し、既刊の論文内容を変更せずに掲載するとの編集方針がとられているため、通読しようとするといくつかの不便を感じるかもしれない。

たとえば、博士論文であれば冒頭に書かれたはずの天神に関する基礎的な情報がなく直ちに各論に入るので、読者は自らそれを補わなくてはならない。複数の論文に重複する内容や表もある。これらも著者が存命ならば整序していたはずである。

そこで試みに、最も読みやすいと思われる一つの読み方を提案したい。それは、次にあげる(一)から(五)までを先に読み、その後には本論を読んでいくというものである。

(一) 巻末の「山本五月のこと」(山本勉執筆)

(二) 巻頭の「刊行にあたって」(小峯和明執筆)

(三) 本論冒頭にあたる「はじめに」

(四) 本論末尾の「天神と童子」

(五) 序章の「菅原道真の生涯とその人格化」

(一)は、山本五月氏の経歴や人物像などを知ることのできる、いわば著者の〈伝記〉である。〈論文は書いてしまえば著者を離れて一人歩きする〉ともいわれるが、著者は天神を研究対象である以上に、より深いところで理解しようとしていたので、本書の場合は著者を知ることが論文解釈の助けになると思う。

(二)は、指導教授による十七頁にもおよぶ長文の刊行の辞である。ここには、著者の経歴と本書の出版経緯および天神に関する研究史や基礎的な情報がまとめられており、その上で本書の概要と意義が明記されているので、本論のプロローグとして読まれたい。

(三)では、著者の関心のありかが示される。冒頭に「この世の生を終え、あの世にある人物が、この世をどうみつめている

か、またこの世をどう動かしているのか」とあるように、著者は〈他界観〉といった独自の観点から天神を見つめていたことが知られる。

(四)では、一枚の絵画の分析が行われる。それは、東帯姿の天神の右脇に小さな童子が立っている、という新出の絵画である。この不思議な絵画の分析を読んでいると、知らないうちに豊饒な天神の世界に引き込まれてしまう。

(五)では、天神信仰の諸相が簡潔に述べられる。天神は現在(〈学問の神〉や〈連歌の神〉)として知られているが、前近代、とくに中世には、さまざまな仏神として信仰されていた。ここには七種類が掲載されているので、丸数字を付して簡単にまとめしてみる。

①和歌の神、②『法華経』護持者、③釈迦の化身、④十一面観音の化身、⑤松の化身、⑥梅の化身、⑦渡唐して悟りをひらいた仏神。

天神は、かつてはこのようなさまざまな仏神として信仰されていたのである。なか

でも①②③は、あまり研究の進んでいない分野でもある。これらに目を向けていることから、著者の視点がいかに新鮮で多角的なものであったかをうかがい知ることができるだろう。

さて本論では、『北野天神縁起』に代表される「天神縁起」の種々相が三部にわけて論じられる。つまり、第一部には天神縁起の始原、第二部には中世の天神縁起、第三部にはお伽草子『天神の本地』を中心とする中世から近世にかけての天神縁起に関する論考が、それぞれまとめられている。

天神縁起はおおよそ、(一) 道真の伝記、(二) 死後の怨霊・天神の活動、(三) 北野社の創建と靈験の三部構成になっているが、著者は主に(二)の怨霊・天神の部分に注目し、神でも仏でも人間でもあるきわめてユニークな存在「天神」とその信仰が、どのように形成され、どのように変容しつつ受容されていったのかという、大いなる謎に迫ったのである。

本書の最大の意義は、天神信仰の成立とも係わる『日蔵夢記』に着目し、それと天神縁起との比較、分析を行ったことにある。『日蔵夢記』を基軸とした天神縁起の研究

は、本書が初めて唯一のものだろう。さらに、従来は天神縁起の絵画か本文のどちらか一方のみを研究する傾向がみられたが、著者は、絵画と本文および天神が詠んだとされる和歌をも視野に入れて考究した。これも本書の大きな特徴といえる。

著者の旺盛な好奇心と研究意欲は、年を追うごとに増していた。調べたいこと、究明したいことは、まだたくさんあったはずである。それが果たせなかったのは非常に残念である。

しかし、今後の天神研究に少なからぬ影響を与えるであろう、著者のこれまでの業績が公刊されたことは、研究者はもとより我々一般読者にとっても、ありがたく幸いなことであった。

(勉強出版 二〇一二年三月三日 九五〇〇円)

(やすはらまこと 本学兼任講師)